

## 知的障害を伴う言語発達遅滞児における仮名文字訓練

医療法人明精会会津西病院・長沼育実  
新潟医療福祉大学言語聴覚学科・吉岡 豊

### 【背景】

言語に遅れがある場合、就学後の仮名文字獲用に困難を示すことが多い<sup>1)</sup>。本研究では、学校生活上で仮名文字使用に不自由を訴えた知的障害を伴う言語発達障害児1例に対し、仮名1文字レベルと仮名单語レベルでの訓練を実施したので、その経過について報告する。

### 【方法】

対象は初診時5歳11か月で、仮名文字訓練開始時6歳3か月の知的障害を伴う言語発達女児1例であった。仮名文字訓練当時の理解語彙年齢は3歳2か月、表出語彙年齢は3歳3か月、大脇式による精神年齢は3歳6か月(PIQ=58)であった。現在は普通学校の特別支援学級(2年生)へ通学中である。

訓練の第I期として数概念の確立とキーワード法を用いて仮名1文字(清音46文字)の理解と音読訓練、第II期として仮名单語の音読、読解、文字配列課題を行った。本例が呼称可能な2, 3モーラ単語各10語計20語を用い、音声を提示しながらの仮名单語文字と絵のマッチングおよび仮名文字チップによる配列課題を各モーラ10回行った。

### 【結果】

第I期にあたる図1に仮名1文字と数概念の関係を示した。この図から第I期の訓練は約5か月を要し、仮名1文字の理解、音読はほぼ可能となったが、数概念が5まで確立すると仮名1文字の理解、音読の成績は急激に向上していることがわかる。仮名单語に関する第II期の訓練結果は図2に示した。仮名单語に関する訓練には4か月を要したが、図2から両モーラとも音読が先行して向上し、最終的には音読、読解ともに全正答となっていることがわかる。ただし、3モーラ単語では全単語の音読と読解が可能となるまで多くの訓練回数を要した。

なお、文字配列は訓練ごとに成績がばらつき、2モーラ単語では1回目の訓練で1語、5回目で6語、10回目で9語、3モーラ単語では1回目の訓練で2語、5回目で6語、10回目で8語と、最後まで全正答にはならなかった。

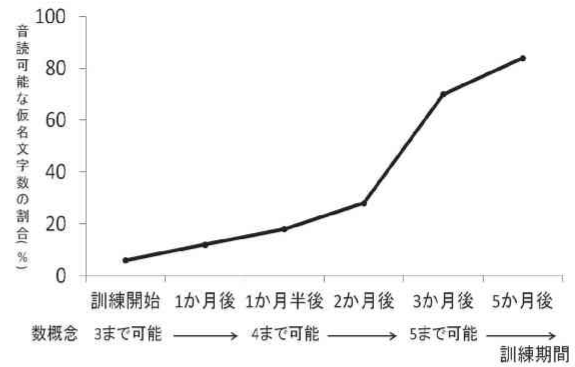


図1. 仮名1文字の音読と数概念の関係

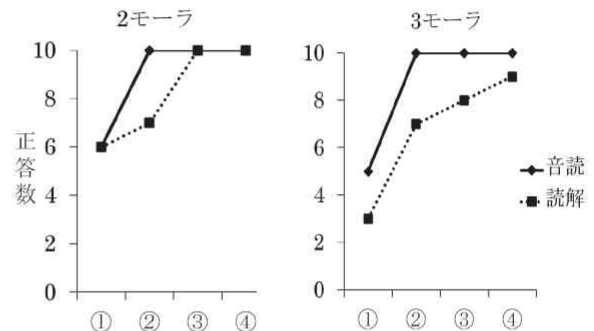


図2. モーラ語との音読と読解の成績

### 【考察】

本研究の結果から、モーラ分解、抽出能力を必要とするキーワード法では、少なくとも5までの数概念が必要と考えられる<sup>2,3)</sup>。さらに、本例では両モーラともに音読の成績が読解に先行して向上する傾向があったことから、仮名单語の読解能力は、文字を音声に変換するルートを経て成立するものと思われる。また、仮名文字配列課題に関しては、呼称能力、モーラ分解、抽出能力などの音韻操作能力以外の何らかの能力が必要と考えられる。

### 【結論】

キーワード法で仮名文字訓練を行う場合は、少なくとも5までの数概念が必要だと思われる。また、読解に先行して音読が可能になる傾向があると思われる。

### 【文献】

- 1) 服部美佳子：平仮名の読みに著しい困難を示す児童への指導に関する事例研究. 教育心理学研究 50 : 476 - 486, 2002.
- 2) 天野清：語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習. 教育心理学研究 18 : 76 - 89, 1970.
- 3) 物井寿子：ブローカタイプ (Shue11 III群) 失語患者の仮名文字訓練について一症例報告一. 聴覚言語障害 5 : 105 - 117, 1976.